

「あらすじ」

主人公は金城華。首里石鹸の店員。繁忙期である母の日を前に、仕事もプライベートも不調。ある日、照屋清美というお客さんが来店する。彼女との出会いをきっかけに、華は親子関係を見つめ直す。

【登場人物表】

金城華（21）首里石齧の店員

照屋清美（57）主婦

糸数麻衣子（23）首里石齧の店員

上原直樹（25）華の彼氏

佐藤里子（36）華の伯母

金城華（8）幼少の華

1 首里石鹼店舗（昼）

金城華（21）が、首里石鹼久茂地店の前で泡を立てている。心ここにあらず、手だけが口ポットのようになっている。店内から同僚の糸数麻衣子（23）がその様子を見ている。

華「……」

2（回想）コーカス本社・研修室（昼）

母の日の商戦に向けて研修が行われている。部屋の中には5〜6名の販売員。華を含めた販売員たちは店長からレクを受けている。

店長「どの商品にするか迷っているお客さまには、母の日ギフトをおすすめてください。感謝の気持ちを伝えるためのメッセージカードもつけてます。お客さまの笑顔を想像しながら、積極的にお声かけしていきましよう」

販売員たちは積極的にメモを取っている。対照的に、華のペンを持つ手は固まったまま。

3 (回想おわり) 首里石鹸店舗(昼)

ふたたたび店舗の前。
先ほどよりも泡の量が増えている。

華「笑顔：：かああ」

華、大きくため息をついて振り返る。するとそこに客の照屋清美(57)が歩いてくる。

手に持っていたボウルが清美の体にぶつかり、泡がついてしまう。

華「なああ！あっ、うわっ、ええっ!？」

清美、ついた泡を手取る。

その泡をじっと見つめる清美。

華「すみませんでした！すぐにあの、タオルを！あの、その」

麻衣子が店舗の中から出てくる。

麻衣子「ちよつとどうしたの？おおおお!？」

えええっ!？」

華と麻衣子、その場であたふたする。

清美「大丈夫です。お気になさらずに」

華「いや、でも」

清美「本当に、大丈夫ですから」

清美、泡を振り払うような所作。そのままその場を立ち去る。

バツの悪い華の顔。

4 リビング（夜）

華、ソファに寝転びクッションに顔をうずめている。華の隣には彼氏の上原直樹

（25）が座っている。二人は同棲中。

華「あああ」

直樹「もう終わったことなんだから。仕方な

いだろ」

華「めちゃくちや怒ってたよ、あの顔は絶対。

あああ」

華、身悶える。

直樹はそんな華の様子を気にしながら。

直樹「……とここでさ、母の日どうする？」

華「どうするって、なに」

直樹「お母さん、まだ海外だっけ」

華「うん」

直樹「沖縄に帰ってきたりしないかな」

華「ないない。仕事で忙しいだろうし」

直樹「いや、でもさ」

華「なに」

直樹「どんなーか。この機会にみんなでお食事

会とか」

華「……は？」

華、起き上がる。

直樹「お母さんに感謝の気持ちを伝えるのつて大切じゃん」

華「なんで食事会？直樹もいっしょにってこ
と？」

直樹「うん」

華「なんで？」

直樹「それは、おまえ、あれさ」

直樹、咳払いをして華を見つめる。

しばし、見つめ合う二人。

直樹は今にも何かを言い出しそうだ。

華、直樹から目をそらす。

華「いいいよ、そんなの。どうせ帰ってこない
し」

直樹「予定、聞いただけ聞いてみ。もしかしたら帰ってくるかも、」

華「いい。わたし、母の日は何もしないっ
て決めてるの」

直樹「なんで？」

華「別にいいでしょ、なんでも」

直樹「もしかして、まだお母さんと不仲な感じ？」

華「別に普通だっただけ。普通の親子」

直樹「じゃあなんかしようぜ。年に一回の大切な日だろ？」

華「わたし、イヤなの」

直樹「なにが」

華「母の日だからって、なんか、みんなさ、お母さんに感謝しましよとか、そういう雰囲気。感謝ってさ、いちいち強制されるもの？」

直樹「強制って、おまえ。そういうことじゃないだろ」

華「もういいから。この話はもうおわり」

直樹「いや、せめて電話だけでも、」

華「あーもうしつこいな！母の日が何よ！」

華、再びソファに寝転がる。

直樹「…薄情もん」

直樹、キッチンへ。

何気にこぼれた直樹の言葉に、華は反応する。

5 バル（夜）

華と麻衣子、バルのカウンターで並んで座る。女子会。

麻衣子は彼氏の愚痴をこぼしている。

華は隣でスマホをいじっている。

華、スマホで「薄情者」と検索する。

麻衣子「仕事が忙しいってさ、ほんと便利な言い訳だよ。彼女の誕生日に残業するかね、普通。上司のお願いだから知らないけど断れ。断って駆けつけろ。こっちはどんだけ準備に時間かけてると思うんじゃない」

華、「薄情者」の意味を知って、ため息をつく。

麻衣子「うん。人の話、聞いてる？聞いてないよね、ぜったい」

華「期待しなきゃいいんだよ」

麻衣子「は？」

華「相手に期待しなきゃ、裏切られることもないでしょ」

麻衣子「それ言っちゃおしまいよ」

華「なんで？」

麻衣子「いや、どうでもいい相手なら期待なんてしないよ？でも彼氏はちがうでしょ。ずっといつしよにいたいって思ってるんだから、こっちは」

華「結婚、考えてるの？」

麻衣子「ええ。そうですね。なにか？」

華「余計しんどいよ」

麻衣子「は？」

華「家族に期待するのって」

麻衣子「……華って、家族関係こじれてる感じ？」

華「いや全然。円満だと思うけど」

麻衣子「じゃあそんなこと言わないでよ。薄情だな」

直樹と同じことを言われて、華は麻衣子の顔を見る。

麻衣子「……なに」

華「わたしって、そうなのかな」

麻衣子「なにが」

華「なんでもない」

華、トイレに立つ。

麻衣子、ぽつんとひとりぼっちになる。

麻衣子「ん？地雷踏んだ？わたし」

麻衣子、テーブルに置きっぱなしの華のスマホ画面に気づく。

そこには「薄情者」の言葉の意味が表示されている。

麻衣子「薄情者。他人の気持ちにあまり関心がなく、まるでロボットのようにながらない」

テーブルには、ふたりのグラス。

飲み干された麻衣子のグラス。

一方、華のグラスはまだ一口もつけられていない。水滴がポタポタと流れ落ちる。

6 首里石齧店舗（昼）

3日後。店舗前で華とぶつかった清美が来店する。

華「いらっしやいま、あ」

清美、会釈する

華「先日は本当にすみませんでした。わたし、ぼーっとしてて、それで、その」

清美、華に気を遣わせまいとして話題を変えろ。

清美「ちよっと（商品を）見ていてもいいですか？」

華「もちろんです。はい」

清美、店内を一通り歩く。

まさかの来店に戸惑う華。

清美、母の日のポップの前で立ち止まり、それを見つめる。決してポジティブな表情ではない。

華は、清美の様子が気になる。

この人も、母の日に対して、自分と似

たような感情を抱いているのではないか。

華は、清美に声をかける。

華「あの、これ母の日用の特別ギフトなんです」

清美、華に話しかけられて微笑む。

清美、いくつか首里石鹼を手に取る。

清美「今年は……どうしようかな」

商品を選んで元に戻す。寂しそうだ。

その様子が、かつての自分を見ているよ

うで、華は声に力が入る。

華「今ならメッセージカードもついてくるの

で、ぜひ。きつと喜んでくれると思います」

清美「……そうだといいいけど」

華「……」

清美「お母さん、喜んでくれるかな」

清美のその表情と言葉に、華の記憶が

噴き出してくる。

7 (回想) 公園 (夕)

13年前。小学3年生の華。薄暗い公

園のブランコ。小さな背中。

小さな手にはお母さんの似顔絵。

今にも涙がこぼれ落ちそうだ。

8 (回想おわり) 首里石鹸店舗 (昼)

華 「ぜったいたい喜びます」

清美 「え？」

華 「ぜったいたい大丈夫ですから。ぜったい」

意図せず、華の口から言葉がこぼれる。

それは叶えられなかった自分の願望か

らこぼれた言葉。

清美、華の声圧に戸惑う。

華 「だって、お母さんのこと大好きだし、そ

の気持ち伝わらないはずないし。だからき

つと、ううん。絶対お母さんに」

華、そこまで言っつてようやく我に返る。

顔を上げると、驚き戸惑う清美の表情。

華 「ごめんなさい！わたし、なにを」

清美 「いえ」

華 「本当にすみません。あの、ゆっくり見て

いっつていください」

華、頭を下げる。

清美 「……いいですね」

華 「え？」

清美 「こんなにもお母さんのこと想つてて」

華、うつむく。清美の顔が見れない。

華 「いや、わたしは。あの」

華、言葉に詰まる。苦しそうだ。

清美「……大丈夫ですか？」

華「ちがうんです。わたし、そんなんじゃないんです」

清美「……？」

華「わたしは、お母さんに」

清美と話していると、華の抑えつけていた記憶がどんどん沸き出てくる。

9 (回想) 里子の家(夕)

里子の実家。リビング。

二十代の里子が姉の希和子(華の母親)と国際電話をしている。

里子「仕事、仕事ってさ、お姉ちゃん。華ちゃん、今年も楽しみにしてたと思うよ。母の日はさ、子どもにとっても大切な日なんだって。いっしょに過ごしてあげてよ。はあ？来年こそって、それ去年も言ってたから。え？華ちゃん？華ちゃんは、いま……あれ？どこ行っただ？」

里子、振り返る。

さっきまでリビングにいた華の姿が見当たらない。戸惑う里子。

テーブルの上には、華からお母さんに贈るはずだったカーネーション。

10 (回想) 公園 (夕)

ブランコをこぐ子どもの頃の華。手にはお母さんに渡すつもりだった似顔絵。

今年もまた「ありがとう」と言えなかった。

手に力が入り、画用紙がゆがむ。

華、あわてて画用紙を元に戻そうとする。

華、シワが残った絵を見る。とぼとぼと里子の家に帰る。

11 (回想おわり) 首里石鹸店舗 (昼)

奥のスタッフルームから麻衣子が出てくる。清美の存在に気づく。

麻衣子「いらっしやいませ」

清美のとなりで華がうつむいている。その背中の様子がおかしい。清美は、華の肩を心配そうにさすっている。

麻衣子「どうしたの？華？」

麻衣子、華の方へと駆け寄る。
華、忘れようとしていた寂しさを思い出して、顔をしかめている。

1 2 カフェ（タ）

数時間後。店舗近くのカフェ。
清美が座っている。手元には首里石鱈のシヨツピングバッグ。
その袋を見つめて、清美も思案顔。
そこに華がやってくる。仕事が終わって、清美と待ち合わせをしていたようだ。

華「すみません。お待たせしました」
清美、やさしく微笑む。

× × ×
テーブルには二人分のコーヒーとケーキ。

華は、自分の過去を清美に話した。

華「暗い話になっちゃって、ごめんなさい」

清美「ううん」

華「でも、母のことは大好きで。ほんとに優しい人だし。だからこそっていうか、お母さんに会えない母の日が余計に辛くて」

清美「うん、わかる」

華「……？」

清美「お母さんが側にいないのは……うん」

清美、首里石鹼を見る。

華、清美の表情をうかがう。

やっぱりこの人も自分と同じ経験をしてきたのだろうか。

清美「このお仕事はどれくらい？」

華「高校卒業してすぐなんで、もう3年です」

清美「そう」

清美と華、コーヒーを飲む。

清美「（独り言のように）巡り合わせかな」

華「え？」

清美「華さんのおかげで今年も……うん。本当にありがとう」

清美、頭を下げる。

華、そのお礼を素直に受け止められない。
い。

華「……」

清美「どうしたの？」

華「わたし、この仕事に向いてない気がして」

清美「……」

華「彼氏とか友だちに、薄情だって言われちゃ

って、でも自分でも分かるんです。わたし、ちよつと人と距離を置いちゃうっていうか。首里石鱒の仕事って、お店に来てくれる人たちと、ちゃんと関係を築くことを大切にしているから」

華、うつむいてしまう。

清美、その様子を見つめて。

清美「華さん」

華、顔を上げる。

清美「もうひとつ、お願いしてもいい？」

と、言いながらも、清美は迷っている

感じ。

華「……？」

清美、本当にもお願いしてもいいものかと

葛藤する。やがて自分を納得させるよう

にうなづきながら。

清美「華さんをお願いしたいの」

清美の表情。不安と期待が交じったよ

うな。

1 3 清美の実家へと続く道（夕）

数日後。華が麻衣子と電話をしながら歩いていく。

麻衣子「だけどあれだね。いっしょにお母さんに会いに行つてほしいって、なにそのリクエスト」

華「めちゃうくちや仲が悪いとかだつたらどうしよう」

麻衣子「それはないと思うよ。照屋清美さんでしょ？その人の名前」

華「うん」

麻衣子「うちの会員さんでさ、履歴見たら結構頻繁に買つてくれてるの首里石齧。んで、母の日は毎年必ずギフト買つてる」

華「そうなの？」

麻衣子「うん。きつとお母さんにプレゼントしてるんじゃないかな」

華「じゃあ、なんで今年は私と一緒に？」

麻衣子「さあ」

目的地のアパートに近づく。

華、清美が駐車場で待っていることに気づく。

清美の手には、首里石齧。

華「（麻衣子に）ごめん。着いたからもう切るね」
麻衣子「はい」

清美、華の姿に気づき笑顔になる。

華、清美に駆け寄る。

14 アパートの階段（廊下（夕））

古びたアパート。築50年以上。

清美と華が階段をのぼる。

玄関に向かう廊下。少し荒れている。

清美「ここも掃除しなきゃ。ごめんなさいね、

汚くて」

華「あ、いえ」

玄関の前。立ち止まる清美。

清美、首里石鹼を見つめる。

華、清美の表情をうかがう。

清美、華の視線に気づき、苦笑い。

清美、カギをいれてドアノブを回す。

清美、部屋の中に入っていく。

15 アパートの部屋（夕）

華、部屋の中を見て呆然とする。

その部屋はもぬけの殻。家財道具など

も一切ない、ただの空間。

清美は申し訳なさそうに、華の方へふ

り返る。

清美「お母さん、少し前に、亡くなっ

華「……」

清美「最近ようやく、部屋の片付けが終わったの」

華、玄関から中に入れない。

清美「ごめんなさい。びっくりさせて」

華「……」

清美「お母さんのいない母の日が初めてで……

ひとりじゃ受け止めきれなくて」

「母の不在」が、ふたりをつないだ。

清美、部屋の方に振り向き直し、あた

りを見回すが、なにもない。

そこにあつた母の思い出も、いつさい

が消えてしまったようだ。

清美「やっぱり、いないね」

まざまざと母の不在を突きつけられる。

清美の背中。

華の足が自然と動き、部屋の中に入る。

清美「ずっとひとり暮らしだったの。でもぜん

ぜん元気だから、勝手に思い込んでんじや

った。ずっと元気でいてくれるって」

16 (回想) アパートの部屋 (昼)

数週間前。ひさしぶりに母の住むアパ

トに訪れた清美。

手には買ひ物袋ときれいな花束。

久しぶりに晩ごはんを作っていたしよに

食べようとしていた。

玄関で靴を脱ぎながら。

清美「お母さん。ごめん。もうパタパタで。今

日はわたしが晩ごはんつくる、」

その言葉を言つて、異変に気づく。

キッチンに飾られた花。枯れている。

（以降、役者の芝居で表現します）

清美の目線の先には、孤独死した母。

おそらく数日は経っているのだろう。

清美、呆然と母のところへ。

17（回想おわり）アパートの部屋（夕）

葬儀も終えて、母の家財も処分し、空

っぽになつた部屋。

清美「お母さん。最後の最後で、ひとりぼっち

にさせてしまった」

華、清美の背中に手をそえる。

清美「（華に）ごめんなさい。こんなこと頼んで」

華、首を振る。

清美「モノもぜんぶ処分したんだけど、お母さ

んとの思い出がどんどん消えちゃう気がして。
いつか記憶の中のお母さんも、私の中からい
なくなっちゃうのかもって思ってた。でも：

清美、シヨツピングバックから首里石齧
を取り出す。

部屋の中に香りが広がる。

清美、その香りの中に母を思い出す。

清美「：：お母さん」

華「：：」

華、首里石齧に目をやる。

自分が売っているのはただの石齧ではな
い。そのことに気付かされる。

そして、人はいつか死ぬことを知る。

華（N）「『巡り合わせかな』あのとときの清美さ

んの言葉が、わたしの心に広がっていく。こ
の出会いは、きっと偶然なんかじゃない」

18（回想）首里石齧店舗（昼）

シーン3の回想。清美の目線。

店舗前では華が上の空で泡を立てている。

清美は、店舗の前で、今年も母の日の
プレゼントを買おうか迷う。

贈りたい相手は、もういないのに。
母を独りで死なせてしまった罪悪感。
清美、店舗に入れずに、立ち去ろうと
する。
その瞬間にぶつかる華と清美。
華「なああ！ あっ、うわっ、ええっ!?」
清美、ついた泡を手に取る。
その泡をじっと見つめる清美。
顔を上げると、あわてふためく華の顔。
凶らずも見つめ合う二人。
これが物語の始まりだった。

19 公園（夕）

華、ブランコをこいでいる。
幼少の頃、寂しさを押し殺したあの公園。
華、お母さんに電話をしようと決める。
その心情とリンクするようにブランコ
がゆっくりと収まっていく。
スマホを持って、国際電話をかける。
華「もしもしお母さん？ うん。こっちはいま、
夕方。お母さん。わたしね、今とっても、お
母さんに会いたい」
華、電話を切って、ブランコをこぐ。

止まっていた時間が進み出すように、
徐々に勢いを増していくブランコ。

20 首里石鹸店舗（昼）

エピローグ。

店頭では華が泡を立てている。

店内には、おめかしした直樹の姿。

レジで母の日用の首里石鹸を購入している。
る。

直樹「このギフトカード、もう1枚もらえませ
んか？あ、いや。自分の母親の分と、あと」

直樹、店頭に目をやる。

華が笑顔で泡を立てている。

店の奥から直樹がやってくる。

華「もー、こんなにおめかしして」

直樹「（首里石鹸の泡を見て）すごいな」

華「（冗談っぽく）よかったら、どうですか？」

華、ボウルを直樹に差し出す。

直樹、両手で泡をすくう。

直樹、首里石鹸の香りに癒される。

華、直樹の表情を見て、うれしそうに笑
う。

この香りが、華と直樹の大切な記憶にな

る。

華（N）「どんなに時が経っても、この香りは忘
れない。あなたの大切な記憶の中には、どん
な香りが広がっていますか」

おわり